

令和3年度緑のボランティア活動に関する
指導者育成委員会（第1回）
議事録

(午後 2 時00分開会)

○事務局 それでは、お時間になりましたので、ただいまより委員会を開始させていただきます。

○松岡緑環境課長 皆様こんにちは。それでは、これより令和3年度第1回「緑のボランティア活動に関する指導者育成委員会」を開催いたします。

本日は、御多忙のところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、委員の就任に御快諾いただきましてありがとうございます。

今年より2年間の任期となりますが、委員の先生方には貴重な御意見を頂戴したいと思っています。

まず、委員の先生方を御紹介させていただきます。

一般財団法人セブン・イレブン記念財団高尾の森自然学校スタッフの小野委員でございます。小野委員には、後ほど御挨拶いただければと思います。

続きまして、国際環境NGO FoE Japanの総務部部長・理事でいらっしゃいます篠原委員でございます。

○篠原委員 篠原です。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 続きまして、公益財団法人日本自然保護協会市民活動推進部長の高川委員でございます。

○高川委員 高川です。今年度もよろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 よろしくお願いたします。

続きまして、特定非営利活動法人自然環境アカデミー代表理事でいらっしゃいます野村委員でございます。

○野村委員 野村です。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 よろしくお願いたします。

続きまして、明星大学理工学部総合理工学科准教授でいらっしゃいます柳川委員でございます。

○柳川委員 柳川です。今年度もよろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 よろしくお願いたします。

小野委員には、通信が戻ったら御挨拶いただければと思います。

続きまして、事務局の紹介でございます。私は、緑環境課長の松岡でございます。それから、保全担当課長代理の平野と、保全担当主任の中村の3名が出席させていただいております。

す。どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、座長の選任に移らせていただきます。座長をお引き受けいただける委員の方はいらっしゃいますでしょうか。

それでは、事務局からの提案でございますが、前回に引き続き野村委員を座長にお願いしたいと考えてございますが、皆様いかがでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○松岡緑環境課長 ありがとうございます。

それでは、座長を野村委員にお願いしたいと思います。

なお、本日は新型コロナウイルス感染症対策といたしましてオンラインでの開催としてございます。その関係で、何点か注意事項を申し上げます。

まず、出席者の皆様は原則としてカメラをオンにさせていただきますようお願いいたします。

それから、ハウリングを避けるために御発言時以外はマイクをミュートにさせていただいて、発言される時は挙手マークを出していただければと思っています。

何か不都合がございましたら、チャットか、事務局のメールアドレスに御連絡をお願いいたします。

今、小野先生が入られましたので、改めて御紹介させていただきます。一般財団法人セブン・イレブン記念財団の小野委員でございます。

○小野委員 小野です。よろしくお願いいたします。

すみません。ちょっとパソコンの調子が悪く、音は聞こえていたんですけども、マイクと画面がつながらなくて申し訳ございませんでした。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 よろしく申し上げます。

それでは、早速でございますが、野村座長より本日の議事進行についてよろしくお願いいたします。

○野村座長 座長をまた引き受けさせていただきます。よろしくお願いいたします。その分、皆様にはたくさん御意見をいただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

本日の内容は、資料にありますとおり2つあるようです。まずは今年度の基礎講習のこと、それから来年度予定している専門講習ということですが、議題1の今年度の基礎講習について事務局から御説明をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○事務局 では、事務局より資料の御説明をさしあげます。

皆様、画面は今、共有されておりますでしょうか。こちらが資料の1枚目になります。

まずは例年こちらの内容を御説明さしあげているところですが、「緑のボランティア指導者育成講座概要」について、いま一度説明させていただきます。

当講座は、緑のボランティア活動を行う都民の自主的な活動を支援・促進していくため、自然観察や緑地保全などの知識や技術を持つ指導者を育成することを目的としております。東京都では、ボランティア人材の高齢化等の課題を踏まえ、新たなボランティア人材の掘り起こしと定着に取り組んでおりますが、こうした初心者への指導ができる人材が必要であり、また、ボランティア活動の活性化に向けてボランティア団体の運営や立ち上げができる人材も必要としてきております。そういった人材を育成する目的で行っているのが当講座になります。

講座は基礎講習と専門講習がありまして、基礎講習は基礎的な指導や単発的な企画の立案などができる程度の指導者を育成することを目指しております。また、専門講習は高度に専門的な指導、継続的な企画の立案などができる指導者の育成を目指しております。

平成29年度まではこちらの基礎講習と専門講習、そしてそのフォローアップといった内容を全て同じ年度に実施しておりましたが、スケジュールが大変タイトであり、受講者にとってもそれによるハードルが高かったということで、今年度からそれぞれ別々の年度に分けて3年に1度のサイクルで実施することとなりました。

この講座の受講から認定までの流れについてですが、まず基礎講習は18歳以上、都内で緑のボランティア活動経験が年10日以上、かつ1年以上の実績がある方を対象としております。36時間の講習を8割以上受講し、修了試験に合格した方を2級指導者として認定いたします。

専門講習は、2級指導者になっていることが受講要件となっております。60時間の講習を8割以上受講し、修了試験に合格した方で、都内で緑のボランティア経験が年20日以上、かつ3年以上の実績がある方を1級指導者として認定してありまして、この1級の認定に当たっては皆様の中で都度、御議論いただくこととなっております。

以上が、簡単ではございますが、緑のボランティア指導者育成講座の概要となります。

続きまして、今年度の基礎講習について御説明いたします。もともとこの基礎講習は令和2年度に実施する予定だったのですが、新型コロナウイルスの影響を考慮しまして1年延期して令和3年度基礎講習、令和4年度専門講習という予定になりました。今回はコロナ対策として例年定員が50名であるところ、その半分である25名に設定いたしました。結果として、25名の定員に対して19名が集まっております。

ちなみに、平成29年度の基礎講習の際は25名でしたので、コロナ禍であることを考えれば

比較的人数が集まったほうではないかと考えております。

平均年齢ですが、今回は58.1歳で、前回より3.5歳下がった結果になりました。内訳としては、今回10代、20代がそれぞれ1名ずついらっしゃいます。また、前は特に60代が11名と多くいらっしゃったのですけれども、今回は50、60、70代で分散したような形となっております。

女性比率も前回から逆転いたしまして、女性が約6割を占めております。また、居住地率も区部が大幅に増えまして、7割の方が区部からいらっしゃっているような形です。

受講者を個別に見ていきますと、保全地域のボランティアとして活動されている方以外にも公園ボランティアですとか森林ボランティアなど、様々な団体に所属されていることが分かります。

これらを踏まえ、今回の受講者のポイントと今後の展望について3点申し上げます。

まず1点目は、本講座のメインターゲットとしては以前委員会においても御説明したとおり、40代から60代の方々を設定しておりますが、そうした方々が今回6割以上の12名お集まりいただきましたので、これは大変よかったと思っております。特にこの方々には来年度の専門講習もぜひ受講いただいて、指導者層として成熟していただきたいと考えております。

2点目は、前回見られなかった10代、20代の若い方がいらっしゃいます。こうした方々とベテランの方々の間で意見交換が行われるように、今年度のプログラムにおいてグループワークなどの交流機会を積極的に設けていきたいと考えております。

3点目ですが、保全地域とは異なる緑のボランティア団体に所属する方が多数いらっしゃいますが、いずれの方も緑地保全活動に興味があるとおっしゃっています。そうなりますと、将来的に保全地域ボランティアの構成員となっただけの可能性もあるかと思しますので、今後ぜひ人材不足に悩む団体を紹介するなど、そうしたマッチングの機会を創出していきたいと考えております。

御参考までに、こちらが今年度の日程の一覧となっております。既に7月3日、10日については終了いたしました。こちらは原則講義の形でしたけれども、コロナ禍であることを考慮して今回はオンラインを併用する形で実施いたしました。次回は、9月18日を予定しております。

続きまして、今回の基礎講習に際し実施した広報活動について御報告いたします。いずれも、平成31年度の委員会において御意見いただいた内容を基に実施しました。

まず、先に御説明いたしましたとおり、基礎講習と専門講習を別の年度に実施したことで、

初回の講義までにゆとりを持つことができ、今回募集期間をたっぷり2か月設けることができました。

次に、広報媒体を拡充いたしました。こちらの赤字のついているところですが、保全地域活動団体へのチラシ配布、公園など他のボランティアへのチラシ配布、「環境らしんばん」への掲載を新たに行いました。

さらに、皆様にいただいた御意見を踏まえまして、チラシを大幅にリニューアルいたしました。本来の硬いタイトルは副題にとどめて、見出しを工夫しました。また、活動風景の写真を取り入れて全体的にデザイン性を重視してフルカラーで今回印刷いたしました。また、受講生の活動体験についてもこちらの中面のほうに記載しております。3名の方について御協力いただきました。

こうした広報活動を行いまして、実際に今回の基礎講習の受講生が本講座を知ったきっかけですけれども、こちらはグラフの一番上なのですが、知人や所属団体からの口コミ紹介、そして東京都の広報というものが最も多い結果となりました。入り口としては、こうした媒体から本講座のことを認知して、より詳細を知るツールとしてチラシを御覧になっているというパターンが多いかと思えます。

この傾向を踏まえまして、次回の基礎講習が令和6年度になりますけれども、その方向性としましては、まず本講座の目的が既にボランティア活動をしている方に現場指導力を身につけていただくということもあるということ踏まえまして、やはり現役のボランティア団体の構成員の方に周知を強化していくのが最も効率的ではないかと考えております。

保全地域のボランティア団体やその他の様々な緑のボランティア団体に対しましてメールやチラシを送付したり、さらには団体内でのお知らせをお願いできればと考えております。

また、そうした団体に所属している方の中には日頃からそういうボランティア活動の様々な情報収集を行っている方もいらっしゃると思いますので、引き続き環境に関連する既存の媒体、例えば環境局のホームページや「里山へGO!」、環境情報サイトなど、そうした既存の組織や媒体を活用していけたらと思っております。

なお、次回広く募集を行うのは3年後の令和6年度の予定になっております。6番の令和4年度専門講習につきましては、基礎講習を修了し、2級の指導者の認定を受けた方が対象となりますので、来年度はそうした方々、過去に基礎講習を修了した方や、もちろん今年度の受講生もそうですけれども、過去に2級を取られている方に直接アプローチしていきたいと考えております。

最後に補足ですが、3年後に大々的に募集をかけた際に、そもそもターゲットとしているボランティア団体構成員のこちらの赤い枠の層が厚くなっていないければ、私たちが募集をかけても人が集まらなくなってしまうかと思いますので、引き続き保全地域体験プログラム、通称「里山へGO!」といった自然体験活動を通じた普及啓発ですとか、体験プログラムのリピート層をサポーターとして団体構成員に近づけていくなど、そうした保全担当の持っているほかの取組も今後推進してまいりたいと考えております。

以上で説明を終わります。

○野村座長 ありがとうございます。

今、説明がありましたけれども、委員の皆様、何か御意見がある方はいらっしゃいますか。

では、小野さんからお願いいたします。

○小野委員 とても今回募集も含めてよかったんじゃないかと思うのですけれども、ちょっと危惧しているのが、資料に「受講者の属性とポイント」というところがあると思うのですが、10代の方が年間の活動日数が10日間で、今度は60代の方が平均で46日間と、結構開きが出ているんです。やはり経験値のところだけ開きが出ると、同じ話を聞いていても多分、分かる人と分からない人の差が出てくるのかなと感じるところです。これはどうやって埋めていったらいいのかというのは検討しなければいけないのですけれども、今回の申込みの属性とポイントというところを見ると、これだけ開きが出てしまっていたんだというのはちょっと感じているところです。

それから、広報活動に関してはとてもよかったと思います。実は「里山でGO!」も環境局と一緒に、環境局の部門下という考えでもいいのでしょうか。それでいいと思うのですけれども、実はうちの高尾の自然学校でも「里山でGO!」から来るお客さんが非常に多いんです。ですから、情報発信としてそこは結構強く押していてもいいんじゃないかと思います。

あとはチラシのリニューアルですが、課長もありがとうございました。多分、費用がかかったんじゃないかと思うのですけれども、カラーにしたことで物すごく読みやすくなって、多分これが参加者増につながったところではないかと思っております。

それと、「受講生が本講座を知ったきっかけ」のところ、所属団体で口コミを聞いたというのがあるのですけれども、基本的にいろんな広報をやるのもそうなのですが、評価の高いのは口コミが絶対的なんです。そうだとすると、これだけある意味ではブランディングというわけではないのですけれども、ボランティア養成講座のところ周知徹底されてきた、評価されてきたところの表れではないかと思えます。

今後の広報活動の方向性なのですけれども、事務局にちょっとお聞きしたいのですが、過去の受講生に対しての案内というか、広報はやっているんですか。

○事務局 これまでも専門講習を募集する際には過去の受講生にお声がけしているところではありますし、実際に直前の基礎講習ではなくて少し前の基礎講習を受講した人が何名かいらっしゃるといことはありました。

○小野委員 顧客の何年分のリストというのは何かあるんですか。

何が言いたいのかというと、過去に卒業した人たちがあの講習を受けてよかったなという形で声をかけてもらうきっかけとして、そこら辺は個人情報はどう取り扱われているか分からないんですけれども、新しくまた新年度募集しますので広報の御協力をお願いしますと、例えばDMか何かで1人に5部くらいでも送るといのは結構効果が出てくるんじゃないかと思っていたのですが、個人情報の取扱いを東京都さんのほうでどうやっているか分からないので、そこら辺は検討の余地はあるかなとは思っております。

以上です。

○事務局 今、小野委員がおっしゃったDMをお送りする相手方というのは、過去に受講してもう専門講習を修了された方という意味でおっしゃっていますか。

○小野委員 そのとおりです。ある意味では、その講座を受けて顧客満足度が高いんだったら、ではあの人にも紹介しようということが絶対出てくると思うんです。確かにいろいろな施設に送ったりというのはあるんですけれども、目に留まる効果という比率的なものは正直低いんです。それよりは、実際に受けた方が、あなたはこれを受けたほうがいいんじゃないのというのが効果あるかなとは思っているんです。

実は、ここ2年コロナなのでやっていないんですけれども、私が海外研修の募集をやっているときに、広報で一生懸命やっているのですが、来る3分の1から半分ぐらいは過去の研修生の口コミが多いんです。だから、やはり実際に自分が体験した中で、こういうことを同じように受けたほうがいいんじゃないかと、ある意味ではマッチングがぴったりくる広報のほうが効果的には出るのではないかとちょっと感じたところでした。

○野村座長 ありがとうございます。これは、御意見として受け取っていただければいいですね。

ほかの方、いらっしゃいますか。

高川さん、どうぞお願いします。

○高川委員 私もほぼ小野さんと同じ意見なんですけれども、広報のチラシが大々的に変わ

ってとても効果があってターゲット層に届いたんじゃないかと思いましたので、ぜひこの感じで加速されるのがいいかと思います。

私も、効果的な広報の最大の1つがやはり口コミですので、既に受講した方にチラシを送るというのは絶対やったほうがいいですし、当協会の指導員講習でも必ずそれはやっていますね。一番、効果が高いです。

あとは、年齢層を考えるとFacebookは使っていそうなので、Facebookを使う手だてを考えたらいいんじゃないかと思います。プロジェクトページをつくって、既存の指導者さんに入ってもらって記事をシェアしてもらおう形で広報するというのはいいいと思います。

多分、今後課題になるのは、3年に1回しか広報はしないということなので、その間やはりブランディングが下がっちゃうとか知名度が下がっちゃうということで、そういう意味でもプロジェクトページを何か講座をやっていますというような発信を拡散してもらうようなFacebookみたいなものをつくるとか、あとは年に1回でも説明会だけはやるとか、何か3年に1回はクリアしたほうがいいんじゃないかなと思いました。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

今はSNSと、それから3年に1回ということで、その間の広報をどうするかというようなお話ですけれども、この辺は何か事務局のほうでお考えとかあればいかがでしょうか。すぐに答えが出そうもないですか。

○事務局 Facebookページは、私どもも局単位だったり、「里山へGO！」単位だったりという形でつくっているものなので、このためにつくれるかどうかというのは内部で確認が必要かなというところと、3年に1回ブランクが空いてしまったというお話のところは、今おっしゃっていただいた過去の基礎講習の受講者だけでなく、もうクリアした方に対してアプローチしてそこから広げていただく。あとは、そうした方々がいらっしゃるであろう団体に対しても、今年度と同様にチラシを配布したり、できる限りのことはしていきたいと思えます。

○野村座長 ありがとうございます。確かに、さっき言っていた年代層からするとFacebookがいいのかな。SNSに関してはFacebookを使っている年代がぴったりなのかなというような感じはします。

○事務局 個人情報の観点で、過去に受講された方の情報をこちらでどれぐらい保管しているかというのも、ちょっと確認してみないとなかなか分からないところなので、そうした方々

の情報がもしなかったときにはその方々の今の御所属先とか、そういったところに間接的にはなってしまうんですけども、アプローチしていくのは少なくともできるかなと今、思ったところでした。

○野村座長 ありがとうございます。

柳川さん、篠原さんいかがですか。

では、先に篠原さんからお願いします。

○篠原委員 ありがとうございます。

2ページのところで、一番下に「保全地域ボランティアとのマッチング機会の提供を検討したい」とあるのですが、何か具体的に考えていることがあるでしょうか。

○事務局 やはり団体さんによってはそういった中間層といいますか、40代、50代がなかなか入ってこなくて困っているという声を上げていらっしゃるところがあって、そうした団体に例えば募集のチラシを作っていただいてこの講座の最終回にお配りするとか、何ならば直接お越しいただいて話を聞く機会を設けるとか、団体側のほうもどういったところに門戸を開いていけばいいか、どういうところに直接チラシを配りに行ったり広報を載せたらいいのか、それさえ分からないような方々がいらっしゃったので、そういう方々とお会いする機会をこちらで設定できたら理想的かなと考えております。詳細はまだ検討中です。

○篠原委員 ありがとうございます。それはすごくいいなと思います。直接話す機会があるとうれしいなと思います。

あとは、19名、これだけいらっしゃって結構実技の時間とかがあって顔を合わせる機会は多いのかなと思うので、ぜひこの中の人たちの交流も積極的にできれば、その中でうちにおいでよということができたりもするのかと思うので、結構いろいろ制約があって、この間、座学の講義を拝見させていただいたんですけども、あまりしゃべれる雰囲気じゃなかったりしてすごくもったいないなと思ったので、せっかくこれだけ機会があるので実技のところでも少しずつ交流ができるといいなと思いました。

○事務局 ありがとうございます。

実は、篠原先生がいらっしゃる前の回ですが、高川先生と小野先生に御講演いただいた回でグループワークをやったんですけども、やはり座ってグループを組むような形になるとその中で会話が発生したりとか、そのときにはすごく盛り上がりを見せていたので、やはり今後の講義の中でも各講師との調整ではあるんですけども、お互いにおのずと意見交換をする得ない場といいますか、何かそういう時間があるといいなと思っております。ありがと

うございます。

○野村座長 ありがとうございます。篠原さんはそのぐらいでよろしいですか。

○篠原委員 はい、ありがとうございます。

○野村座長 では、柳川さんいかがでしょうか。

○柳川委員 3年に1度の件についてちょっとだけコメントといいますか、今オリンピックがいろいろ話題になっていますが、オリンピックは4年に1度ですので、みんな4年に1度と覚えているから4年に1度で成立していると思うんですが、そんな感じで3年に1回ということが周知さえできれば、次を逃しちゃうとまた大分、先だから今、受けておこうというふうにすることもできると思うんです。ですから、3年に1回というのを、それしかないんだったらよくよく伝えると逆に効果があるかもしれないなとちょっと思いました。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。この3年に1回、3年後に向けてというのは、委員のどなたか、その間にこんなことをやっておくといいよというような案とか何かありませんか。どうでしょうか。つないでおく。

高川さん、どうぞ。

○高川委員 私がさっき言ったとおり、説明会は1年に1回やってもいいんじゃないか。とにかく雰囲気をつくって囲い込んでおくというのは有効な手段ですね。

○野村座長 ありがとうございます。

あとは、この講座に参加するのに1年以上の活動とか、年に何回とか、そういうのがありますよね。それをクリアしていないと受けられないよということがあるので、それをクリアするための何かアプローチというか、これは受けてほしいのでこういうことをやってくださいとか、広報として何かそのようなことができるといいんじゃないかなと思うのですけれども。

1のほうは、これでオーケーですか。

○事務局 はい。

○野村座長 それでは、またこの基礎講習のことについても後で思い出したらいろいろと御意見いただくとして、ひとまず2の専門講習のほうにいきましょう。よろしくお願ひします。

○事務局 ありがとうございます。続きまして、来年度予定しております専門講習の内容の検討に入りたいと思います。

まず資料4で平成29年度、前回の専門講習のアンケート結果をお示しいたします。

「満足度」の欄に御注目いただきたいと思います。「満足」「ある程度満足」というのが高ければひとまず御満足いただけているのかなと考えているのですけれども、「普通」という割合が高いとそれほど満足していなかったという結果なのかと考えております。

この中で、特に「普通」の割合が大きい科目について今回黄色く着色しております。こちらが、いずれも29年度に初めて導入した実践活動という講義になっております。

具体的にコメントを見ていきますと「「実践活動」中間相談会」で、「この時点では発表のイメージがつかなかった」「ただグループで発表するだけで終わってしまった」「経験に差があり、受講者同士の相談は難しい」「講師と相談したかった」。

最終回のほうも同じように、発表のイメージがつかめないですとか、個人のテーマについてアドバイスを求める時間が欲しかったというふうなコメントが並んでおります。

一方で、こちらの最終ページのほうに実践活動についてのアンケート結果というのを特出ししております。こちらでは、実践活動に当てている実施時間ですとか発表形態、必要性についてアンケートを取ったのですけれども、それらについてはちょうどよいとか、やはり必要性は感じている、例えば活動場所で行っていることがベストとは限らないとか、学んだことを生かしていくというふうな視点を得ることができる、学んだことが身につくと同時にメンバーと知識の共有ができるとか、内容や、方向性については御評価いただいているところかなと思いますので、こちらの実践講習、実践活動の進め方、特に「普通」という感想の多かった中間相談会、最終相談会、その実践活動の流れを調整するための時間というのは特に改善を図っていきたいと考えております。

そのほかの講義につきましても多少コメントはあるんですけれども、時間が足りない。それは、例えば講師の話がとても面白くてもっと話を聞きたかったとか、せっかくフィールドに出ているのもっと時間をかけて観察したかったとか、そういったコメントが何か所か寄せられているところです。

ただ、時間はやはり全体の時間数が限られている関係で、なるべく盛り盛りで盛りだくさんというふうに増やし続けていくこともできませんので、内容を少し絞ったりですとか、特にどの点についてお話いただくとかというのを少し講師と詰めていく必要があるのかなと考えております。今回は、特に大きな見直しをしたいと思っている中間相談会、最終相談会の「実践活動」という点について御相談したいと考えております。

資料5の中で、先ほど申し上げた実践活動の見直し、令和4年度の専門講習で大きく見直

すことについて特出ししております。そもそも実践活動とはというところなのですけれども、専門講習ではボランティア活動を安全に企画・運営し、活動の意義を指導できる人、または活動の目的や活動地域の目指す姿を明確に描き、周囲の共感を得られる人という人物像を目指しております。狙いとしては「受講生各自が学びを実践する活動を通じて、講座の習熟度向上を図る」ということを掲げております。これを目的として導入した科目になっております。

実践活動の具体的な内容ですけれども、平成29年度はまず基礎講習と専門講習が同じ年度にありましたので、10月下旬の専門講習のガイダンスで、実践活動とはという概要を御説明いたしました。その後、各自受講生に、講座の合間を縫っておのおの実践活動の企画・実施をしていただきまして、12月と1月に先ほどの中間相談会、最終相談会という時間を設けて、その中で進捗確認をいたしまして最終回の2月に発表を行うというものでした。

御参考に、その当時の受講生が設定したテーマと実施状況を表にしております。

実践活動の成果としましては、受講者が自身の所属団体にその企画を持ち帰って話し合いを行ったりして講座で学んだ知識を共有して実践する機会が創出されたこと、実際の活動をイメージしながら現場で生かせる「生きた知識」を身につけられたといったことが挙げられます。

一方で、先ほどのアンケートにもありましたように、なかなか進め方のイメージが分からず、調整や検討に時間を要してしまった。それによって実施に至らなかったり、講師の助言を踏まえたものにできなかったというふうな課題が現在あります。

こちらを踏まえまして、令和4年度の改善点としてはまず1点目、講座の開始時期が遅いということについては今回1年間で専門講習を実施しますので、それは4月から開始するという事で改善できるかと考えております。

検討や調整に時間がかかってしまう、進め方が分からないというところについては、初回のガイダンスできちんと前回の事例を紹介して最終的な発表のイメージを持ってもらうことで、テーマやスケジュールについての検討の時間を設けて意見交換を行っていくということを考えております。

このように、初回しっかり方向づけをして丁寧にサポートを行うことで、受講生にとってもスムーズなテーマ設定ができて計画的に活動に取りかけられるのではないかと考えております。

そして、テーマについてあまり講師の助言を得たり相談したりできなかったというところ

について、中間相談会、最終相談会という時間を見直しまして、現在考えていることとしては講師の数を増やして個別に相談できるような体制を取るということです。受講者の不安や疑問をそこで解消できればと考えております。

続きまして、今申し上げたのが専門講習の中で大幅な見直しを行う1点目ですけれども、もう一点、今回新たに追加するものがございます。それが、団体運営力向上のための特別講座の導入です。こちらは、平成31年度の委員会において御議論いただいたものになります。

本講座は、現場指導力のある指導者層の育成というのを前提としておりまして、受講者の多くもまたその現場指導に必要な知識や技術の獲得というのを期待しているところであります。一方で、近年ボランティアの高齢化ですとか担い手不足が深刻化している中で、持続可能なボランティア運営というのも指導者の役割として求められつつあります。

そこで、一部の団体運営に意欲のある受講者向けに団体運営力向上のための特別講座を設けたいと考えております。この“団体運営力に意欲のある”というところは、全員にその時間を提供してしまうと、来ている方々全員がそれを求めているかということとそこにやはりギャップがあるというお話が以前ございましたので、一部の意欲のある方向けにという形で設定しているところです。

イメージとしては、この図のようにそもそも専門講習というものがございまして、緑地保全活動コースと自然観察・体験活動コースがあるのとはまた別のところで団体運営力向上セミナー、こちらは仮称ですけれども、こうした形で任意参加の特別講座を設置したいと考えております。

現在の案ですけれども、受講料は無料、対象者は令和4年度緑のボランティア指導者育成講座の受講生の方、またはこのほかにこれまで緑のボランティア指導者の1級、2級の認定を受けた方も対象にしたいと考えております。

これは、今回、専門講習の年度に講座を設けるに当たりまして、これをその専門講習の認定に必要な時間に入れようとしても、やはり任意である以上は専門講習の認定要件にするというのがなかなか難しいのではないかとということで、あくまでも任意のオプション講座、受けてほしい人が受けていただくというふうな位置づけにしたところです。そうなりますと、必ずしも令和4年度の専門講習の受講生のみが受けられるものというふうに限定する必要もありませんし、今まで受けた方はこういった講座がなかったわけですので、ぜひ御希望のある方にはこうした講座も受けていただければと考えております。

また、先ほどの議論でありました3年に1回というところのブランクがありますけれども、

これまでの全受講者向けではないですが、そうした役割を持たせることで一部、周知、普及啓発の役割も果たせるのかなと今、少し思いました。

内容についてはぜひ皆様にも御意見いただきたいところではあるのですが、大枠としては講義とワークショップの二本立てというのを考えております。

以上を踏まえまして、資料6で専門講習の改善策をお示ししております。まず、黄色く着色したセルに御注目ください。

先ほど改善点の1つ目として挙げた実践活動についてですが、初回の「専門講習ガイドランス」において実践活動のガイドランスの時間というのを設けたいと考えております。初回の活動、初回のガイドランスにおいて進め方を説明して、発表事例も紹介しながら受講生にテーマやスケジュールを検討してもらって、それをできれば講師やほかの受講生と意見交換をしていただくというようなイメージです。

次の「行政との協働」という時間なんですけれども、こちらが内容的に、ボランティアとはという理念的な部分ですとか、ボランティア活動に必要な行政やNPOとか、そういう様々な主体との調整、そういった運営による視点のものが多いかなというところで、この内容を特別講義で代替して、この時間を今までなかった専門講習ガイドランスの中に盛り込みたいと考えております。

さらに、中間相談会と最終相談会については前回、平成29年度の際にはグループごとで受講生が発表して進捗確認をして終わりという形であったようなのですが、そうではなくて、グループには分けつつも講師を交えてしっかり意見交換を行う。そのためには講師の方、または補助スタッフは様々なジャンルの専門家の方をできれば呼び出して、複数人配置してゆっくり相談できる時間を設けられたらいいなと考えております。

それから、その他の講義につきましては、内容と時間配分について個別の講師と調整をしたいと考えております。特にこれについてもっと知りたかったとか、あとはグループワークを入れてほしいとか、例えば安全管理、安全対策の講義などは危機管理のためのそういったグループワークとかワークシートを使った時間を設けてほしいというような意見もありましたので、そういったところを講師と調整していきたいと考えております。

令和4年度の専門講習の概要としては、以上になります。

なお、現段階ではこの専門講習の大枠のポイントですとか、科目の位置づけだったり、主な内容だったりということについて御意見をいただきたいと考えておまして、個別の講習の内容については年度内に検討を進めまして、また具体的な内容が詰まったところで御意見

をいただく場を設けたいと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○野村座長 ありがとうございます。

いろいろと新しいこととか改善案というのがありますので、これは結構、話が出るかと思うのですけれども、どなたかいかがでしょうか。

では、高川さんどうぞ。

○高川委員 まず質問からですけれども、前回から始められた実践活動なのですが、企画だけで終わった方がかなり多かったことの原因分析として、開始時期が遅いというのが挙げられているのですが、実際に時期の問題だけだったのでしょうかというのが質問です。モチベーションとか、やったことで得られる魅力などが伝わらなかったとかだったら、講師ではなくて実際にこういうのを一からやった方に話を聞いたほうがモチベーションが上がるのかなと思ったので、その原因分析を聞かせてもらっていいですか。

○野村座長 分かりますか。

○事務局 推測の部分も多いんですけども、そもそも時期としてスタートが遅くて時間が足りなかったという御意見も実際には何件かありました。計画を立てて、調整が必要だとか、お金が必要だとか、そういうところから緻密に詰めていくと計画だけで終わってしまうというふうにおっしゃっている方もいらっしゃいました。

また、そのほかに、内容としてかなり自分の所属団体全員を巻き込んで、とても1人で実行できるようなテーマではない方が多いので、そういった形でグループを巻き込んでやるとなると、それは時間だけでなく、内容の調整とか実現可能性というところに個人差があったのではないかと考えております。

実践のみ、企画のみという方もいらっしゃるのですが、それが企画書のみの方であれば、配布するチラシの案のようなものまでつくって、実際には至らなかったけれどもチラシは完成させたとか、結構企画のみと言っても進捗には個人差があったかなというところがあります。

○高川委員 ありがとうございます。

これは、開始は何月だったのですか。

○事務局 初回のガイダンスが10月の下旬です。人によっては、時期をちょっと見誤って秋の企画をしてしまって、あっという間に過ぎてしまったとか、そういうのもあった方がいらっしゃいました。

○高川委員 分かりました。では、時期ですね。

○野村座長 あとは、最後までイメージがつかめなかったというようなものもありましたよね。アンケートのところで、発表のイメージがつかめなかったとか、そんなようなものがあったと思うんですけども、どんなことをやればいいのか、何を求められているのかが分からなかったみたいなどころがあるのかなというのがちょっと思ったところです。

ほかにはいかがですか。

柳川さん、どうぞ。

○柳川委員 ありがとうございます。

先ほどの何を求められているか分からなかったという発表のところについて少し意見があるんですけども、ちょっと場面は違うのですが、大学でも実習のいろいろな授業をしますが、今はコロナのことがあって対面の授業をしながら実習資料はグループで共有しながら家でネットを使って作ったりすることがあります。

そのときに今、職場で使っていて一番便利なのは、Googleのスプレッドシートやパワーポイントに似たスライドがあって簡単にパワーポイントに変換できるんですが、それを私だったら私のフォルダで受講している学生にそのリンクを送って全員で共有して、その中にグループが何班もあるんですね。

だから、この専門家の講習でいったら、ここに参加されている方の発表する資料がそのフォルダの中に共有されていてのぞき見できるというか、同じ受けている人がどのようなことをしているのか見ながらやるようにすると、学生だけでこの講習の方に当てはまらないかもしれないんですけども、レベルが飛躍的に向上します。

やはり人に見られると、先生だけに見られて自分の成績が悪いのはいやという子もまれにいるんですけども、そうじゃなくて同じように学んでいる人がこんなふうに進んでいるんだと思ったら、いや、いや、いかん、いかんと言って頑張り出すというような傾向がやはり人間は誰しもあるのかなという気がしますので、さらすとか、そういう意味ではなくて、学び合うという意味で情報共有しながらそういう資料とかを、今回改善された案ですと最初のほうにこういうことを課題にしますよという説明があるかと思うのですが、そのぐらいの段階で、例えば企画の共有みたいなフォルダができて、そこからほかの人たちがどんなふうに進めているか見ながら、いいところを学べるというふうに進めるといいのかなと、少し思いました。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

今までは、ほとんど講習自体が紙ベースですものね。前回からリモート参加も可能ということになったわけで、少しそういうことも考えようによってはいろいろ改善の余地があるのかもしれないですね。

ほかにはいかがですか。

では、小野さんからお願いします。

○小野委員 今、先生が言われているように、私も見られるというのは絶対あるべきだと思います。なかなか今回の年齢層というか、全体の年齢層からいうと、Google、何それというのが多分メインになっちゃうと思うんですね。

今回の7月に高川さんとやったときに私も感じたのは、使える人は使ってもいいと思うんです。それで、できない人はできない人でやり方を考えてハイブリッドでやるというのはすごいありだと思っただけです。

ですが、できる人は先行してやるのはいいんですけども、そのツールを活用できない人にやはり合わせてあげなければいけないところがあると思うので、やはりワークショップでお互いの進行状況とか考え方、あとはスタンスとか、そういうのを学べるような中間というのはすごく重要だなと思ったんです。

それで、可能であればですけども、この中間というのを中間だけではなくもう一回増やしてあげるとか、要するにお互いの進捗をシェアできるような場をもう一回ぐらいでも増やしてあげるのはとてもいいと思いますし、うちの財団がやっている海外研修と同じではないことは分かるのですが、実は何かというと、研修で知り合った人たちの横のつながりというのは物すごく重要だと思っただけです。

例えば、同じ境遇になったときに、あのときのあの人に相談してみようかなというような、やはりお互いのコミュニケーションが取れるような考え方、それと得意な部分、不得意な部分分かるような時間を中間の発表、相談会か何かのところでもう一回取るのか、時間幅を広げるのか分からないですけども、増やしてみるというのはありじゃないかというのは聞いていて感じたところです。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

では、篠原さんどうぞ。

○篠原委員 ありがとうございます。

今、小野さんの話を聞いていて、確かに中間報告会、相談会以外の場所でもう少し時間という話で、ふと思いつきですけれども、これだけ会う機会が何回かあるので、その時間の最初の10分とか、講座の最初の10分だけ、では今日はこの人の発表というような感じで中間で講義の会のどこかに挟み込んでいくというのはありかなと今、思いました。まとまって時間を取るといって大変な感じがしてしまうので、ジャストアイデアです。

それで、私は別の視点でその場所で聞こうと思ったのが、団体運営力講座のところでも素朴な疑問なのですけれども、これはボランティア指導者育成講座に関わっていない普通の人は募集の枠に入れないということですか。

○事務局 その対象をどのように設定するか、どの層に普及啓発するかというところは考えたいと思っていて、この講座が指導者育成講座と銘打っている関係で、完全オープンにしたときに初心者の方が来て、それで本当にいいのかどうかはまだ考え切れていないところです。そういう意味で、基礎的な知識がある方という意味で今、仮置きで既に認定を受けた方という設定で書かせていただきました。その辺りはいかがですか。

○篠原委員 何か運営上の壁があるのかなと勝手に思ったのですが、そういうわけではなくて基礎知識がある方という決め方なのであれば、それはそれで必要かと思います。団体運営力向上セミナーという名前だけで言うと、あらゆるところで実施しているものではあるので、里山のこういう運営に関わるものである程度対象範囲をつくること自体は別に構わないと思います。ちょっとそこが気になったので、以上です。

○事務局 ありがとうございます。

○野村座長 ありがとうございます。

仮称ですけれども、この団体運営力向上セミナーについてはまだまだ何か御意見が出そうな感じがあるのですが、小野さんとか高川さんとかいかがですか。

では、小野さんお願いします。

○小野委員 団体運営力については去年、私も言ったかと思うのですけれども、今、私は高尾の森自然学校で勤務していますが、今までは全国の環境NPOのネットワークづくりをやっていて、やはりすごく感じていたのは、自然保護をやりたい、地域が大好きだとやっているのはいいんですけれども、結構疲弊しているんです。

何かというと、この間ちょっと物が足りないから自分のポケットマネーから出してとか、お金にまつわる話とか、あとは人材がいなくてとか、いろんなそういうことがあったんです。それで、この講座の中でいろいろな自然の保護保全をする技術とか、知識を得るのはいいん

ですけれども、やはり最終的には個人ではなく組織で動いていく話なので、組織で運営するに当たってのお金や広報、人を巻き込む広報力、そういうところをちゃんとしっかり身につけてもらわないと、簡単に言うと持続可能な活動はできないとは私も思っているんです。

そういう意味でも、例えば簡単にお金で言ううちの財団も助成金を出していますけれども、セブン・イレブンさんは助成金を出しているんですかと、知らない方も結構いらっしゃるんです。環境保全とかに関しての助成金の情報の集め方自体知らない方もいる中で、そういう団体運営のイロハを覚えてもらうというのはちょっと違う側面であっていいんじゃないかと私は思います。事務局のほうから提案のある特別講座というような形の任意参加でも全然いいのではないかと思いますけれども、できればこれから保全に関わる指導者であるならば、団体運営というところにちゃんと頭を置いてもらいたいというのが私の気持ちのあるところなんです。

逆に、野村さんなども運営のところで苦労されている話はあるんじゃないですか。

○野村座長 ありがとうございます。

団体運営はやはり苦労するということですね。やり始めてみると考えていたのと違ったということがよくありますので、こういうふうに講座みたいな形で、これを受ければできるようになるというわけではないと思いますけれども、そういういろいろなアイデアとか、情報とか、そういうものを得る一つの機会視野が広がるというのでしょうか、そういう意味ではいいのかと思います。それで、特別講座は任意参加というような位置づけで私はいいかなとは思っています。これを入れ込もうとすると時間的に厳しいですから、体験のほうのこと、企画の実践活動のほうをもう少し厚くしようとする時間的にはなかなか難しいのかなと思います。

私も言っているんですか。「受講生のテーマ一覧」というのが11あって、例えば1番、2番とかは1日のイベントみたいなものを企画されている。こういうものを企画してほしいというような、最初の意図はそんなことだったかと思うのですが、ただ、団体の設立とか、新規会員定着に向けた改善策の検討とか、結構重たいテーマもあるんです。より具体的で、それはそれですごくいいかなとは思っていますけれども、それをやるにはちょっと短過ぎたとか、短い期間でやるにはちょっと重た過ぎたというところがあるんじゃないですか。だから、あらかじめある程度テーマ設定のところもどんな説明だったのかが分からないので何とも言えないんですけれども、例えばこんな感じというもので、なかなか難しかったというのは初めてだったからというのものもあるのでしょうかね。

次をやったらもう少しすんなり、もう少しモチベーション、目的意識が持ちやすいようにできるのではないかという感じがしますけれども、この議題2に関しての質問とか御意見とか、ほかにどなたかありますか。

高川さん、どうぞ。

○高川委員 まず団体運営力向上セミナーについてなのですが、たしか2年前に出た話を踏まえてだと思のですが、多分そのときも言ったと思うのですが、内容はとてもよいかと思うのですが、これは講師を招いて本当にやろうと思うと講師料が結構かかってしまうのではないかと思うので、このメンツでやるんだったら3くらいしかできないから2日間やれるのか。現実的に考えてどういった講師陣を想定されているのかというのを教えてくださいたいのが1つです。

もう一つが、全体に戻って専門講義で育成すべき人材像に照らして、特に保全管理のカリキュラムなんですけれども、植生管理調査での管理等も踏まえてさらに枝葉が分かれていく感じになっているのですが、植生調査が実際にどれくらいの講座の結果、どれくらい役立っているのかとか、そもそもこのラインアップでしょうか。順応的管理は分からないんですけども、植生調査というのは結構ピンポイントかなと思って、普通に考えるとチェーンソー講習とか、もうちょっと実践的だったり、ボランティアにふさわしいものにしたほうがいいのかなとか、あとは植生よりはもう少し絶滅危惧種とか、そちらに特化してこういう生き物のライフサイクルがあるのでこういう管理をしましょうというほうが向いているのではないかと思うのですが、その辺りの設定の経緯とか思想を教えてくださいたいと思います。

大きくは、以上です。

○野村座長 それでは、まず事務局からこの講座についてお願いします。

○事務局 団体運営力向上のほうは、私のほうからもぜひ御意見をいただきたいところではあったのですが、そもそも2日間というふうに設定をしているのは、このように対象を広げたところで、やはり継続的に受講いただくのは1日か2日が限定かなと思います。

ただ、やはり1日で講義とワークショップをぎゅっとまとめてやるのもなかなか忙しいような気がしたので、そこで間を取って2日間というふうに仮で入れさせていただいております。

それで、前回の平成31年度の委員会の際に御意見をいただいた内容の中に、やはりこのオプション講座でがっちりそれぞれの項目について知識を得ることはとてもじゃないけれども難しいので、それぞれの項目についての触りの部分をしっかり吸収して持ち返っていただ

くというふうなことがあったので、そのために今ここに細かく記載してある資金獲得ですか、人材育成ですとか、ちょっとテーマを挙げさせていただいたところです。

ただ、実際これを全部お一人にお話しいただくというのはそもそも可能なのか、やはり分野ごとに別の方にお越しいただいたほうがいいのかというのは私も考えあぐねていたところでした。

ワークショップのほうは1日目を踏まえてということなので、1日目にお越しいただいた方、全員でなくても構わないかと思うのですけれども、その方々にお越しいただいて、その前日の議論を踏まえた上でそれぞれの団体について知識、議論を深めていただくようなイメージで考えております。こちらについてはもう少し具体的な、実際にそういうセミナーとかシンポジウムとか開催された御経験などがある方がいらっしゃればぜひ御助言いただきたいと考えているところです。

もう一点ですが、植生調査のほうが実際に雑木林とか、そういった放置されている場所において、それを今後活用したり復活させていく、その前段階で現状を分析するための方法としてコドラートの調査方法などを実際に現場で伝授して、森林の構造とか、そういったものを現地でやってみるという時間を当時は設けていました。

それで、チェーンソー講座とか、そういった道具を使う講座というのは皆さん指導者になる前の段階で団体のほうや、または東京都の別の事業でもそういった講習を開く機会はあるんですけども、そういったスキルは逆にお持ちだったりして、今回いらっしゃる方はどちらかという調査分析という視点をもともと持ち合わせていらっしゃらないので、そういった意味でこの講座を設定したのではないかなというところです。

○高川委員 そうですね。アウトプットが、体験のほうは観察会をしようとか、そういうイベントなのかと思うのですけれども、植生管理の方のアウトプットのイメージが割と湧きにくいのではないかと思います。多分、最終的には皆さんとしても保全計画をつくって、それに基づいて順応管理をしていくというところかと思うのですけれども、結構ハードルが高いし、部分的にも植生調査をしましょうというのと、手段は1つではあるんですけども、何か得たものがどう最終的にまとまるかというところまで伝えるのが大事かと思います。最終的には順応的管理でやっていきましょうということだったらいいんじゃないかと思うのですけれども、順番とか工夫したほうがいいのかと思いました。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

柳川さんから手が挙がっているので、どうぞ。

○柳川委員 ありがとうございます。

植生調査はいいと思うんですけども、時期が10月28日に植生調査だと、ちょうど休みに入りましたみたい感じで地面の上にはおりませんというような植物もいっぱいいると思うんです。ですから、時期が本当にこれは適してその目的を達成できるときなのか、もったいないと思います。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

これは、多分来年度となると1年かけてやれるので、時期などはもうちょっと変えられるのかなと、29年度とはまた違った時期でできるのではないかと思うんですけども。

○高川委員 もう一つ、質問していいですか。

実際に受講されてどれが役立ったとか、これが特に役立ったというような声は聞いていないですか。植生調査とかをしてすごく役に立ちましたというんだったらやるべきだと思いますし、そういうものはお持ちではないでしょうか。

○事務局 この講座のどれが一番よかったですかというふうな順位づけみたいなものは行ってないので、果たしてどれが一番役に立ったかというデータはないんですけども、植生調査に関しては今この自由意見欄はネガティブな意見を特記しているので、ポジティブな意見を載せていないんですけれども、一部、今までそういうコードラートというものを知らなかったとか、そういう調査方法があつてどういうやり方なのかを知ったこと自体はよかったと書いてくださっていた方はいらっしゃいました。

○高川委員 ちょっと聞き方を間違えましたが、受講して2、3年たって実践に生かされたという声は何か聞いていないですかという質問でした。

○事務局 その後の追っかけの調査は行ってないので、今どれを実践されているかというのは持ち合わせていません。

○高川委員 分かりました。都としては、植生を何とかしたいというのが前提で、現況把握と順応的管理というスキームは押さえてほしいということでしょうかね。

○野村座長 意味としてはそんなことだと思います。多分なのでですけども、やはり保全活動団体の構成員というんでしょうか。保全活動をしている方々に受講していただくというのは今までのスタイルだったので、どちらかというとも体を動かして何かいいことをしたいということで、体を動かす、木を切るとか、きれいにするというようなことを最初の動機で活動

している方が多くて、そこで細かい動植物がどうなっているか、どういう変化が起きているのか、今どういう状態なのかということにそれほど詳しくない方が多いのが全体的なもともとの受講生のパターンというのでしょうか。それと、こうなってほしいというようなところがこういう講座になっているんだと思います。

でも、果たしてそれが今もそうなのかというのは少し考えなくちゃいけないところかとは思いますが、参加者の分母の部分がちょっと変わってきている可能性もありますよね。ですから、募集のときから少し、これからはただ活動団体にそういう参加者を求めるのではなくて違う参加者層というものを求めるのであれば、この講座の構成というのも考えていく必要があるかとは思いますが。

そこら辺はどうでしょうか。ちょっと話が前後してしまうかと思いますが、今4年度という、これからだどこまで変えられるかというところがあるのですが、高川さんと同じように何かほかにもっとこういうことのほうが重要なんじゃないかということがあれば、多分、今の段階で言う以外にはスケジュール的にだんだん変えられなくなってしまうかと思えます。あとは、講師陣とかでこういう方がいいよなどという情報があれば、そういうことも今日もし思いつく範囲でお伝えできるようなことがあれば委員の方から意見をいただくのがいいかと思えます。

それと、来年度の専門講習の内容と、もう一つあったのは団体運営力向上セミナーの講師のイメージです。ここは小野さんにお聞きしたいところですが、まずは柳川さんどうぞ。

○柳川委員 お話し中なのにごめんなさい。

講義の内容の予定でちょっとあれなのですけれども、今しかチャンスがないとおっしゃっていたので、例えば緑地保全活動に向けた植生調査とか、柔軟的管理手法での保全の実習とかありますが、それぞれの参加者の方のところで分布している動植物とか、そういったものが何かというのは地域によるんですけれども、様々なデータが存在しているので、講師の方がそういうものを紹介してあげるとその地域で本来あるべき在来種というのが分かったりするので、どういう植物を増やしていくといいのかとか、そういう情報を講師の方がその回に伝えてあげると植生調査の結果を生かしやすいのではないかと思います。

それから、忘れてしまいますので先に言ってしまうのですが、今回新たに企画されている任意の講習ですね。こちらの参加者の募り方について意見なのですけれども、基礎のほうの講習がありまして、それには参加するための資格が必要ですね。今回ここで設けられているも

のというのは、非常に手間暇かけた講座だと思うんです。それで、今すぐは実現できないと思うんですけれども、例えばですが、これまでの講義とか、これから講義するときに、オンラインの講義の内容などをレコーディングしてコンパクトなものにまとめて、それを何回かの受講にして、オンライン講習を受けただけの人でも任意のほうには参加できるとか、今の全部のデザインというのはいろいろ個別に相談できたり、とても充実した内容になっていると思うんですけれども、そうじゃなくて、それよりも一歩手前のもう少しそこまで気持ちが強くない人もいるかもしれない。

こういう活動を広げるのは、いかににわかファンをつくるかだと思うんです。ファンをつくるには、にわかファンをつくることから始めなければいけないので、にわかで参加できる部分を設けることで3年に1回の部分もクリアできるし、3年に1回チャレンジできるような手前の知識をそういう動画とかで事務局としてはただ情報を垂れ流しておけばいいんです。それで、その情報を見て、それで例えばオンラインで時間が制限されるとかちょっとしたテストみたいなものを作って、そのテストに受かったら認定証を渡してとか、そういった手間暇かけない自動化されたシステムみたいなものがあったりすると、それを受けた人は任意のほうを受けていい。

それで、手間暇かけた講座のほうはやはりこのまま手間暇かけた形で維持するのも非常に重要だと思うのですが、一方でちょっと間口を広げることをして、任意や3年に1回の基礎講習、その上の専門講習につなげていく枠組みが必要かと思います。

それで、この専門の講義の内容も多分満足度を上げるのはフィードバックにかかっていると思います。それは、その中での相談とか、例えば発表のときも多分発表を見た結果、自分だったらもっと本当はこうできたのにとか、くやしさが残っているから普通という評価をくだしていると思うので、それは十分なフィードバックがそれまでなされていなかったということなので、もうちょっと講師とコミュニケーションを取って参加者が自己実現をこの場でやりたかったことができるような別の資源を割かないといけないのかなと思います。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

どうでしょうか。今いろいろ御意見をいただきましたけれども。

高川さん、どうぞ。

○高川委員 私は最後のほうでもいいですけども、大丈夫ですか。

○野村座長 今、どうぞ。

○高川委員 では、手短に申し上げます。

柳川さんが言われた植生管理のほうについてとても共感しまして、もう一回カリキュラムを見直して思ったのが、順応的管理とかは現状評価の方法が分かってもやはり目標設定のところ結構難しいんじゃないかと思いました。それで、よくよく考えると里山での活動が中心なんですけれども、里山の生態系を理解するには知識のところ結構不足しているのではないかと思って、そもそも攪乱ですね。人の手が入ることで維持される生態なんですよとか、具体的に生き物がどうそれに呼応しているのか。なぜ攪乱依存なのかとか、そういう知識を、生物多様性のことも生態系のこともあまり伝え切れていないので、そこは座学として増やしたほうがいいんじゃないかと思いました。

あとは、目標設定に有用な方法のやり方のレクチャーなどもやったほうがいいんじゃないかと思って、あとは古地図とは言わないですね。迅速測図を見て、過去はどういう植生だったかを知るとか、私たちがやっていた触れ合い調査というのは地元のおじいちゃん、おばあちゃんにどういふ植生がそこでの資源利用がされているかを聞いて目標設定化したとか、基礎的な知識と目標設定のところをフォローアップした上でこの植生管理、順応的管理はどういう意味かという大枠を伝えてあげたほうがいいのではないかと思いました。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。

小野さん、いかがですか。

○小野委員 私は逆に植生とか、そういうところを専門的には正直なかなか分からないことがあるのですが、そこら辺は多分委員の皆さんの言われている内容で私も理解しています。

それで、先ほどの方向性の部分のところ受講生のテーマとあったと思うんですけども、私はこれは多種多様でいいなと思ったんです。理由は何かというと、多分その団体が抱えている一番の課題を受講生が自分自身、ある意味では何とかしたいなと思ってテーマ設定していると思うので、ここは私はフリーで全然いいんじゃないかという感じはあります。

それと、団体運営力の向上セミナーの部分のところ、先ほど柳川先生のほうからもあったように枠を広げると、私も少し広げてあげてもいいんじゃないかと思うんです。

ですが、ここはなかなか難しいんですけども、実は毎回、毎回海外研修という私の担当している話が出て申し訳ないのですが、海外研修を受けたOB会をうちの財団でつくっているんです。そのOB会に入るには研修を受けないと入れないんです。そうすると、OB会に入りたいので研修を受けさせてくださいというような方も、ある意味ではそれも長期的なブランド

イングでうちはやっているんです。だから、専門講習のどれくらいの部分を取り込みながらブランディングにつなげていくかというのも少し戦略で考えてみるのもいいのではないかと思います。

あとは、団体運営力の向上セミナーですけども、今、案で書いてある資金調達、持続可能な人材育成、広報、立ち上げの準備、世代交代ですね。ここまではいいのですが、私も地域でセミナーをやっている中で目標としているのは仮説検証なんです。

何かというと、この講義を受けたとして自分で感じ取ってこれはやらなければいけないというのを、その日のうちに企画をつくってもらっているんです。それに対しての検証だから、失敗してもいいんです。失敗しても、何が失敗で、どう改善していったらいいのかというところまでつないであげないと、ただ単にセミナーなどでよくあるのが、いい話ですね、すごくよかったです。でも、それが終わると、では何をやればいいのかと思っている人が非常に多いんです。

だけど、もし本当にやるんだったら、そのセミナーでいろいろ情報を提供して、その中でワークショップを使いながら自分たちで団体のほうをどうしたいのか、どう改善したいのかをちゃんと組み上げて、それを最終的に1か月後か何かでも検証してみんなで発表して情報をシェアできるような形を取っていかないと効果は出せないのかなと、一方的な話で終わらせるというのはもったいないんじゃないかなというのは感じています。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

篠原さんどうぞ。

○篠原委員 ありがとうございます。

植生調査とか順応的管理手法とか、私もよく分かっていなくてすみませんが、野村さんもおっしゃっていたように、保全団体で活動している人というのは作業が好きで入ってきた人が多くて、なかなか実際にどういうふうを考えるのかというところはあまり座学で学ぶ機会がないし、それを伝える人というのなかなか団体内にいない場合があると思って、去年環境局だったか、植生調査の講座をやったときも内部で、こんなやり方があるんだと結構話題になって皆さん知らなかった感じだったので、これはあっていいなと思っています。

あとは、高川さんがおっしゃっていたように、いろいろな地元の方の話を聞くとか、そういうものも含めてあったらいいなというのと、それも踏まえてこの講座の期間を通じて実践活動というワークもあるんですけども、それとは別に一回一回の講座で得たものをどう自

分の活動に活かしていくか。小野さんがおっしゃっていたように、そこを考えると最終的に終わったときに自分たちの団体でこれをやっていこうという何かがつくれたらいいなと思います。

ここを改善していこうとか、そういう結果というか、何かまとめられたらいいなと思うので、例えば講座をやっていく中で一回一回の講座でワークをするというのはあると思うんですけども、それが何か連続していけたらいいのかなと、昨日学んだことを踏まえて今日学んだことを加えてさらに分析してというような感じでブラッシュアップしていけるような感じの連続したワークになっていくと、最終的にいいものが手元に残るのかなとちょっと思いました。

○野村座長 ありがとうございます。

さっき私は、今日でないと、などと言ってしまいましたけれども、事務局のスケジュール感としては来年度の講座に関してはどんな感じですか。

○事務局 内容に関するスケジュールとしましては、大体4月に講座を開始するとして、募集を始めるのが2月とか、その頃から宣伝を始めるので、年末くらいには遅くとも内容の確定等、講師の候補の方とも日程調整などを始めたいということで考えております。ですから、もちろん本日いただいた御意見を踏まえて、もう一度科目の構成などは検討しますけれども、秋頃までまだ内容は調整可能です。

○野村座長 構成を大きく変えるわけではないんですけども、この講座をやるんだったらこちらのほうがいいんじゃないかというような御意見が今あったように、それをこの中で調整するのはどうしたらいいでしょうか。

○事務局 今ある講座を入れ替えたりとか、そういうことでしょうか。

○野村座長 はい。例えば、さっき高川さんから、こちらが元にあるんじゃないかというような話があったと思うんですけども。

○事務局 例えば、29年度の専門講習の科目というのも、もしかしたら本来こういう並びではなくて、講師との調整の結果たまたまこういう順番になってしまったとか、そういったこともあったのではないかと思うんです。

さらに、各回で講師が異なるので、その講師の方の得意分野に寄ってしまったりとか、なかなか前後の講座で関連性がつけられなかったというところもあったと思うので、そこは私どものほうで科目の組み立てを考えたときにこの順番は絶対変えないとか、この流れは変えられないとか、今、御意見をいただいたように各回の最初の10分は意見交換にするのか、最

後の10分を意見交換にするのか、各回必ずワークを入れるとか、そういうことはこちらのほうでそういった軸を決めて講師にかけ合うことは可能かとは思いますが。

あとは、今、御意見をいただいた植生調査ですとか順応的管理とかというつながりももちろんそうですし、やはり内容をそういう視点で整理をしていくと、この時間はもう少し短くてよかったかなというところとか、あとは各回に散りばめられている運営的なお話を全て特別講義に寄せて少し時間を短くして、小野さんがおっしゃっていたように中間相談会とかをもう一回設けるとか、そういった時間の工夫はまだ可能かとは思っています。

○野村座長 分かりました。ありがとうございました。

ほかに何かこの来年度の講座、専門講習とセミナー、特別講座のほうで何か言っておきたいということがある方はいらっしゃいますか。

○高川委員 この委員会について、年度内どのようなスケジュールなのでしょうか。

○野村座長 委員会の日程は、どんなスケジュールで進みますかということですが。

○事務局 平成31年度の際は1月に第2回を開催しているのですが、今回は先ほど申し上げたスケジュールで年内に来年度の専門講習の内容を固めるんだとすると、11月頃とか、冬になる前にこちらで検討した専門講習の案をもう一度御議論いただく機会を設定したいと考えております。

○高川委員 ありがとうございます。了解です。

○野村座長 そうですね。そのくらいのほうがいいですよ。やはりある程度皆さんに了解というか、見ていただいて、ではこれで募集を始めましょうというほうがいいのかと思います。

あとは、全体を通して戻っても結構ですけれども、何か総括的に御意見ありませんでしょうか。

高川さん、どうぞ。

○高川委員 今日、明日の話ではないのですが、今後を考えると検討しておいたほうがいいのは、タイトルを「緑のボランティア指導者育成講座」と、ボランティアという名前が入っているのですが、もはやボランティア団体も収益を上げながらやらないといけませんし、今は40代の方とかは結構団体をつくって収益事業とセットでやっていらっしゃる方も多とか、例えば指定管理者としてNPOの団体がまずいて、枝葉で受発注事業をやっている方もいらっしゃるの、多分こういう方々のターゲットになるということを考えると、ボランティアという言葉の扱いは今後要検討になるんじゃないかと思いました。

今日、明日の話ではないのですが、どこか議事録に入れておいていただければと思います。

○野村座長 私も似たようなところで思っていることがあったのですけれども、これは緑のボランティアの人たちの中から指導者を育成していくというような講座の設計になっているわけですが、これは前にこの委員会の中でも話が出たと思いますが、そもそもそういうふうにしたように育成というのが進むかという、そうでもない。リーダー的な人というのはほかの分野の活動でリーダー的にやっていて、緑のことにちょっと興味があって入った人がリーダーになったりというようなケースも考えられて、今、活動している団体の人たちに求めるというよりは、ほかで活動していて一生懸命やっている人でちょっと似たような自然の分野とか、例えばキャンプの指導者みたいな資格を持っていたり、活動しているとか、ボーイスカウトで中心になってやっていると、今後そういう人がターゲットにできるのではないかなと感じました。だから、3年後の講座とかに向けてはそういうところも開拓していくのがいいのかなと思いました。

あとは、指導者というのが多分活動団体の人などにとっては重たい言葉なんじゃないか。そこにハードルがあるのではないかと思うんですけれども、例えば学校の先生とかだと指導者という言葉に関してはあまりハードルが高くないのかなと、学校の先生、小学校とか中学校の先生ですね。高校の先生でもいいんですけれども、そういう先生などで緑の活動に興味がある方を取り込んでいくとか、そういうことはちょっと求められるところがあるのではないかと感じましたので、そこを広げて基礎講習の受講者を募集するときにそういうところにターゲットを当ててもいいのではないかと思います。

そうすると、活動経験とかというのがネックになってくるので、その前に活動をちょっとしてもらってというのも紹介をするというか、例えばボランティア経験というのは「里山へGO!」などでもいいわけですね。そういうような講座がありますよというのをどんどんお知らせをして、こういう講座が6年度はありますから出てくださいというようにできるといいなとちょっと感じました。

少し長くなってしまいましたけれども、ほかにそういう全体的なところの話でもしあればお願いします。

小野さん、どうぞ。

○小野委員 今、「里山へGO!」の話が出たので、「里山へGO!」は本当にもっと活用していくべきだと私も感じているところなんです。

それで、どこまでできるかは分からないですが、さっき指導者養成講座のある意味ではサイトという話があったと思うんですけれども、もしそれができないのであれば研修生の過程

というか、研修中の情報とか、そういうものも環境局と連携してやっているわけですから、環境局の情報発信として何かこういう講習をやって、こんなことをやりましたというのも、そこをうまく活用して広報できるのではないかと思うんです。そうすると、3年に1回だと、ではいつまで待つのかという話になってしまうのは確かにそうなんですけれども、それはうまく活用してもらいたいなと感じています。

あとは、先ほどのボランティアですが、実はボランティアという言葉は私も同じなんです。何度も言っている海外研修ですが、正式名称は今は環境NPOリーダー海外研修なんです。実は3年前に名称を変えて、3年前までは環境ボランティアリーダー海外研修だったんです。確かに、ボランティアというよりは今はNPOという位置づけでしょう。

ですが、うちの研修の場合は、NPOを引っ張っていく本当の日本のトップリーダーを育成したいという意味合いでNPOという名称を使いましたけれども、この委員会の前回か、前々回か私も忘れましたが、話したと思うのですが、今の保全活動の中では結構二極化されているんです。例えば高川さんの言われているような、ある意味では社会を変えていこうとか、地域を変えて行って事業化をしていこうというところもあれば、今回の参加者層のところでも60代、70代の第二の生活でちょっとやってみたいなと思って、収益とか、そういうものは考えていない方もいらっしゃるわけで、その名称はどちらがいいか。例えばボランティアを取ったほうがいいのか、変えたほうがいいのか、そこら辺は私も心が動いているというか、はっきり言い切れないところです。私の知っている範囲では、そういう層というか、その中は二極化されていると感じているところです。

以上です。

○野村座長 ありがとうございます。

それでは、柳川さんどうぞ。

○柳川委員 私も、ボランティアという言葉が好きで人と好きではない人と、響く人と響かない人といろいろいるかと思うんですけれども、今いる職場に学生ボランティアセンターというのがあります。そこでは、様々なボランティアをしたい人を募って、学生がしたいボランティアと、実際にあるボランティア活動をつなぐということをしているのですが、ここであまりぺらぺらしゃべってはいけないのかもしれないですが、大学ではそういうのをハブ構想と呼んでいます。

ここで言えば、東京都の環境局がハブになって、緑と東京都民をつなげる、ハブになるというような感じで、今は保全地域を主に対象にして「里山へGO!」とか運営されていると思う

んですけれども、それだけに限らず、本当に緑地をつなぐハブになったつもりでいろいろしていきようないい名前が思い浮かばないですが、少なくとも職場ではボランティアという言葉を使わずに、学生がボランティアすることはすごく学びになるのでどんどんして欲しいと思っていて、どうやったらそういう学生を増やせるか考えているんですけれども、そういうふうに変えたりしています。

○野村座長 ありがとうございます。

その辺はいろいろ工夫の仕方がありますし、だんだん社会の変化で感じ方というのも大分違ってきているところもありますので、名称を変えるとなると結構面倒くさいんでしょうけれども、考えていく必要はありますね。

最後に、篠原さんから何か言っておきたいことがあれば。

○篠原委員 特にないです。私はすごく勘違いをしていて、ボランティア指導者なんだと思っていました。ボランティアを指導する人ではなくて、ボランティアで指導者ということなんです。どちらなのかなと思って、皆さんの理解だと多分ボランティア向けで指導者になりたいボランティアさん向けなんです。どちらにも取れるなと思ったので、違うふうに解釈していました。

○野村座長 どちらなんですか。多分、緑のボランティアというボランティアの中の指導的立場の人ということで、指導者もボランティアということですね。

○事務局 はい。

○篠原委員 分かりました。

○野村座長 そうしたら、いろいろな意見を出していただいたところで、本当に最後にこれだけはということがなければ事務局にお返ししたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは、御意見とかはいろいろいただいたところです。事務局のほうにお返ししますので、最後を締めていただければと思います。スケジュール的なこととかも含めてお願いします。

○松岡緑環境課長 先ほど来、ボランティアとか指導者のお話があったのでございますけれども、まず指導者につきましては自然保護条例の中で指導者ということで位置づけられてございまして、指導者を育成するということに基づいて今度は規則のほうでボランティア指導者の講座とか、そういうことで決めているところなんです。ですから、いずれも条例とか規則で決められている言葉ですので、これを直すということになると大分ハードルが上がるということをまず御理解いただきたいと思います。

それで、ボランティアにつきましてはこのボランティア指導者育成委員会だけでなく、ほかのところでもあらゆるところで、例えば保全地域のボランティア団体とか、そういったところでも使っている用語でございまして、こちらの修正にも関わってきますので、この言葉をすぐ変えることができるかというところと相当な議論が必要かと思っております。

そのことをまず御理解いただいた上で、ただ、いただいた御意見につきましてはできる限り検討いたしまして、変えられるものについては変えていくというふうに考えさせていただきたいと思っております。

○事務局 ボランティアのことで教えていただきたいのですが、ボランティアよりNPOが主流になっていくのだらうというのは何となくは分かるのですが、ただ、今の実態で、保全地域で活動している団体が30団体くらいいらっしゃる中で、その中でNPO法人として活動されているのはかなり少数で、地元の方たちで構成しているようなボランティア団体のほうが多くて、団体によってはボランティアなんだからお金をもらっても困るというような人たちもまだいらっしゃるんですが、私たちが先のことを考える展望として、そういう方たちが例えば活動を終えてNPOとかに入れ替わっていくようなことが起きていくと考えていいのかとか、そうなるのにあとどれくらいの年数が例えばかかりそうなのかとか、ちょっと難しい話だと思うんですが、予測的なものがもし皆さんの知識の中でおありになれば教えていただきたいと思ったのですが。

○野村座長 どなたか、いかがですか。

小野さん、どうぞ。

○小野委員 全国のNPOを見ていた中で、やはりボランティアの部分の疲弊感というのは私も感じていたんです。それで、実際に今うちでやっている高尾の自然学校のところで、最初の頃のボランティアの方は大分いないんです。これから高齢化になるから、ある意味ではパイが増えてくるとポジティブに考えればそれはいいかもしれないのですが、どこまでこの状況ができるのか、私はちょっと心配なところがあります。

高川さん、何かありますか。

○高川委員 では、専門なので申し上げます。

今、ボランティアの団体がすごく力を持っているのは、1990年から2000年にかけて労働人口がピークアウトして退職者数がそこでがっと増えるんです。そこでいろんな団体が立ち上がってNPOもできたという、人口動態でいうとかなり特殊な一過性のものになります。恐らくボランティアの平均年齢は65歳くらいですね。それで、身体的な引退を70とか75とかと考

ると、急速な変化になりますし、既にいろんな団体が減少に転じています。森林ボランティアの登録団体数とかもそうですね。ゼロになることはないし、これからもボランティアの団体さんというのは大事なんですけれども、もっと多様に考えていく必要があるし、この講座が3年に1回と考えると、もう見越した対応をしておいたほうが絶対いいと思います。

ですから、そこはこの委員を絶対引き受けたいと思った理由の一つです。私たちも同じ課題に直面していて、今のところ解決策がなかなかない状況です。

○野村座長 ありがとうございます。本当にそうだと思います。

だから、緑地の管理の在り方とか管理団体の在り方というのもいろんな形ができてくるのではないですか。まだまだだと思います。いずれにしても、持続可能性というのはやはり課題だと思いますので、一過性でどこかで終わりに終わってしまうということがないようにしていくには、その先を見越した何かアクションを起こしておかないといけないというところですね。

その条例ということもあるので、もちろん名称に関してはなかなか難しいと思うんですけども、何か愛称とか、通称とか、これは括弧で緑のボランティア指導者育成講座とか、それはだめなのかな。それは苦肉の策かもしれないですけども、いずれというか、そこら辺も考えていかないといけないとは思います。

それでは、よろしいでしょうか。たくさんのお意見を出していただきまして本当にありがとうございます。かなり久しぶりの会議だったので、皆さんからたくさんお話をいただけてよかったと思っています。

以上をもちまして、第1回の委員会は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

事務局のほうにお返しいたします。

○松岡緑環境課長 野村座長、ありがとうございました。

先ほど申しましたとおり、年内には2回目の会議を開きたいと思ってございます。ですので、今後も引き続き皆様の貴重な御意見をいただければと思ってございます。

本日はお忙しい中、誠にありがとうございました。またどうぞよろしくお願いいたします。